

『慕帰絵』における「大谷」の表象

—初期本願寺をとりまく人と宗教空間—

池田忍（千葉大学）

小沢朝江（東海大学）

『慕帰絵』（本願寺蔵）は、親鸞の曾孫にあたる本願寺第3世覚如の伝記絵巻として、覚如が没した観応2年（1351）に制作された。足利将軍に召し上げられた間に全10巻のうち1・7巻が紛失するも、返還後の文明14年（1482）に補作されており、制作年代や伝来過程を窺い得る中世絵画の基準作である。

真宗史における覚如の時代、とりわけ13世紀末から14世紀初頭にかけては、門弟の力を得て構えた京都東山・大谷の親鸞廟を預かる留守職と、その土地の所有をめぐり、覚如と父・覚恵の異父弟・唯善（覚如にとっては叔父）との争いが深刻化した。一族内の内紛や南北朝の戦乱によって、破却や焼失を被った大谷房は、初期本願寺にとってきわめて重要な場であった。また、留守職の継承や本願寺の存続には、本所である比叡山延暦寺の院家の承認、さらには東山大谷周辺の宗教環境が重要な意味を持っていた。このような背景を踏まえて、本発表では、覚如没後の初期本願寺をとりまく状況を背景に制作された『慕帰絵』の空間と人物描写を分析し、大谷房の人々が周囲に見せたかった「自画像」を読み解きたい。特に、修業を終えた覚如が大谷での活動を本格的に始める5巻1・2段に注目して、東山大谷の「場」とそれをめぐる「人」の描写を検討する。

5巻1段は覚如と同居する唯善との争論、5巻2段は「親鸞伝絵」制作の逸話を描く。読み解く手がかりとなるのは、『慕帰絵』完成翌年の文和元年（1352）に門弟の乗専が撰述した覚如の伝記『最須敬重絵詞』（7巻28段。絵巻制作の実現は不明）と、その構図を絵師に指示した「指図書」（本願寺蔵、原本現存せず）である。両者は取り上げた事績が相違することを宮崎圓遵氏らが指摘しており、『慕帰絵』が覚如の文芸的側面を強調するのに対し、『最須敬重絵詞』は門弟の立場から伝記的事績を補完したとされる。本発表では、改めて両者を比較し、『慕帰絵』がそれぞれの時期の大谷房の性格を建築表現によって演出し、覚如像の創出を試みる点に注目する。具体的には、例えば両段に見られるように、大谷の表門は一貫して檜皮葺の平唐門で描き、親鸞廟所を暗示する。また、5巻2段では、覚如が絵師を指揮して絵巻を制作する大谷房内だけではなく、門前の風景を広く描く。その描写は、大谷房が面する七観音大道と今小路の交差や、周辺に位置する門跡の候人の坊舎、密教・禅宗・専修念仏等の寺院が集積する宗教空間を、門前の建物と往来の人々により詳細に表現しており、「大谷」の重要性が視覚的に強調されていることが判明する。加えて、『慕帰絵』が、特定の人物の面貌や着衣の描写に細やかな意を払う点にも注目する。すなわち初期本願寺に関わる人々を、従来指摘されてきた血脈を伝える宗主らにとどまらず、対立が知られる一族、血縁の日野家、他寺の僧や門弟らの人々をも描き分けることで、覚如没後の大谷の自画像を創出したと判断される。